藤野厳九郎の学歴

泉　彪之助

魯迅の仙台医学専門学校在学中の恩師、藤野厳九郎は、大正四年、同校の後身である東北帝国大学付属医学専門部を退職した。「仙台における魯迅の記録」が指摘するように、この時の人事異動の意義は、教官の学歴の整備にあり、高等医学教育を受けていない、または留学経験のない教官が、五年にわたって一三人が退職している。

厳九郎も、愛知医学校を卒業したのみであったため退職し、故郷福井県の農村で、一開業医として後半生を送るが、このような針路は、同様な立場にあった教官にとって、程度の差はあれ、共通のものであったろう。

ここでは、明治中期の、医学教育のいわば過渡期に医師となった一人の典型として、厳九郎の学歴をたどってみたい。

(1)　初等教育

明治七年に出生した厳九郎は、明治一四、一五年ごろ、福井県坂井郡第十四番小学区平章小学校に入学した。この時、生家の近くには、後の本荘小学校の前身、中番小学校が開学していたが、厳九郎は、約八キロメートル離れた平章小学校を選んだ。これは、丸岡藩校以来の伝統を有する同校が、人員、設備とも勝っていたためと思われる。

平章小学校の在学期間中に、厳九郎は、野坂源三郎の主宰する私塾に通って、漢学、算術、習字を学んだ。このことについては、別稿に発表した（福井県立短期大学紀要　第九号投稿中）ので、省略する。

一方、平章小学校に在籍のまま、厳九郎は、明治二一年七月龍翔小学校（後、福井県坂井郡一番小学区公立三国小学校。現三国南小学校）に入学した。この二重の通学の理由は、厳九郎自筆の経歴を見ても明らかでない。

なお厳九郎は、このころ、大関村大石家へ養子入籍しており、そのため、現存の学籍簿、小中学校の証書は、すべて大石厳九郎となっている。坪田忠兵衛氏は、この養子入籍を平章校入学のためと解しているが、演者は徴兵制に関連したものと考えたい。「仙台における魯迅の記録」は、

大石家を母の実家としているが、「藤野恒宅家系譜」および自筆の史料では、母ちくをは、奈須田家の出身となっている。

(2) 中等教育

明治二三年三月二七日、厳九郎は三国小学校高等科を退学、同年四月一〇日平章小学校高等科を卒業して、福井県尋常中学校（現藤島高等学校）に進んだ。当時福井県下にあった中学校は一校のみ（女子部を附設）であった。

明治二十五年、中学二年を終了した厳九郎は、愛知医学校に入学した。

(3) 医学教育

明治二五年ごろ、医学教育を受けるには、四つの進路があった。東京帝国大学医科大学、各高等中学校医学部、府県立医学校、および私立医学校である。この内、府県立医学校はすでにその歴史的使命を終り、明治二一年、大阪、京都、愛知以外の医学校は廃止されていた。

厳九郎が、高等中学校医学部に進まず、府県立医学校を選んだ理由は明らかでない。入学資格、修学期間、授業料等の条件は、両者ともほとんど同じであり、尋常中学卒業者が少ないところから、入学資格検定試験の制度があったことも同様であった。

『名古屋大学医学部百年史』によれば、愛知医学校は、学校経営の経済的基礎を固めるため、定員を増加して積極的経営を行った。また、他府県医学校の廃止に伴い、志望者が増加した。厳九郎は、こうした風潮に従ったものかと想像される。

明治二九年一一月一一日、厳九郎は愛知医学校を卒業し、明治三〇年三月一日医術開業免状を受けた。医籍登録番号は、九六六〇号であった。

その後、東京帝国大学医科大学解剖学教室に内地留学した以外は、進学あるいは外国留学の機会はなく、大正四年に至るのである。

（福井県立短期大学第一看護学科）